

地獄の 一季節註解 (十三)

小 田 良 弼

Délires II

Alchimie du Verbe

ランボオの世界は、le monde に対する、知性社会性に由来する一切合財に対する激しい否定行、自己否定、人間否定にはじまり、そこに délires, désordre がみられ、folie の世界が展開せられたのである (Délires I 参照)。しかし、その délires こそ真理の道への、絶対の世界、ランボオの神の世界へ到達するための必須の processus であつたのであり、その意味において、それは聖なる道ですらあつたのである。

Cf. Délires II, P. 55.

Je finis par trouver sacré le désordre de mon esprit.

この精神の乱脈も、所詮は神聖なものと俺は合点した。

そこに死の世界、bleu blanc の世界、寂靜の世界、ennui の世界がひらかれたのであるが、さらに、否定の否定、有の絶対肯定的世界、激測たる生命の展開の世界——ランボオの言葉でいへば aquarium ardent (Bottom), l'été dramatique (Bannières de Mai) がひらかれ、その ennui は超克せられ、innocence の世界がひらかれたので

ある。それはまたキリスト教的ではない神の世界であつたのであり、愛 amour divin 救済を行すべき世界でもあつたのである。

しかし、かかる世界は一步一步の一事一事に神の現成を行すべき行為の世界であり、如何なる意味においても実体化することを許さない、対象的に把握することを許さない世界であつたのである。

Cf. Vies, III.

Il ne faut même plus songer à cela. Je suis réellement d'outre-tombe, et pas de commissions.

これに就いては、夢みる「想憶する」事すら許されぬ。本当に墓場の向ふから来たこの俺だ、何の用事があるものか。

したがってまた、かかる世界に対する、言語を以てする記述は、やはり何等かの意味において対象化する結果をまねがれることができないわけであり、詩筆を執るかぎり、如何なる意味においても対象化することを許さぬ行為の世界との矛盾をさけ得ないわけであり、それがまた神の世界であるが故に、この矛盾を犯すことは同時に神に対する冒瀆であつたのである。ランボオにおいては、詩筆を執ることにかかる矛盾があつたのであり、しかもそれが、ランボオにおいては、とび超えることのできない矛盾であつたのである。かくて遂に詩筆を捨てて、放浪に身

を処することにおいてはじめて、この矛盾の超克が可能であったのである。そこにはじめて完璧なる詩を行ずることができたのである。

また、かかる世界は、本来、二元相対の世界を超え、そのよって立つ一元絶対の世界であることにおいて、元々概念を中核とする言語を超えた世界であった。故にランボオは言葉に対しては絶望的であり、否定的であったのである。

しかし、とにかくにもランボオが詩筆をとってゐた時においては、上記のごとき概念を超えた自己の世界を、概念を中核とする言語をもって表現しようとしたのである。表現啓示しようとしたのである。ランボオの言葉が *paroles païennes* でありながら、同時に *oracle* であるといはしめる様な性格をもつてゐたのである。

Cf. *Mauvais Sang*, P. 17.

Nous allons à l'*Esprit*. C'est très certain, c'est oracle, ce que je dis. Je comprends, et ne sachant m'expliquer sans *paroles païennes*, je voudrais me taire.

俺達は『聖霊』に行きつくのだ。俺の言葉は神託だ、それは極めて確実だ。俺には解つてゐる、ただ、解らせようにも異教徒の言葉しか知らないのだから、俺は黙つてゐたいのだ。

また *Délires II*, P. 52 へ

Ce fut d'abord une étude. J'écrivais des silences, des nuits, je notais l'inexprimable. Je fixais des vertiges.

最初は習作〔研究〕だった。俺は沈黙を書き、夜を書き、描き出す術もないものを書きとめた。俺は様々な眩暈を定着した。

といつてゐるやうな面をもつてゐたのである。

かくてランボオの言葉は、十九世紀のフランス語であつて、同時に神の言葉であるといふ性格をもつ故に、同五十二頁で

Je réglai la forme et le mouvement de chaque consonne, et, avec des rythmes instinctifs, je me flattais d'inventer un verbe poétique accessible, un jour ou l'autre, à tous les sens. Je réservais la traduction.

俺は子音それぞれの形態と運動とを規整した、そして、本能的な律動をもつて、幾時かはあらゆる感覚に近づき得る詩的言辭を發明するべく、悶れたのであつた。俺は翻譯を保留した。

といふ所以である。

またその『Voyant』の手紙の中に言つてゐるやうな *langage universel* など考へ方もランボオに出つてゐたのである。

Cf. Lettre à Paul Demény; du 15 mai, 1871.

——Du reste, toute parole étant idée, le temps d'un langage universel viendra!.....

Cette langue sera de l'âme pour l'âme, résumant tout, parfums, sons, couleurs, de la pensée accrochant la pensée et tirant. Le poète définirait la quantité d'inconnu s'éveillant en son temps dans l'âme universelle: il donnerait plus——que la formule de sa pensée, que la notation de SA MARCHÉ AU PROGRÈS! Énormité devenant norme, absorbée par tous, il serait vraiment un MULTIPlicateur DE PROGRÈS!

——その上、一切の言葉が観念であるからには、世界言語の時代が来ることでせう——……

このやうな言語は、魂のために魂からほとばしるものであらうし、一切を、匂ひも、音も、色も、その裡に要約してをり、思想を獲得しつつ身に引きつける思索から出たものであります。詩人はその当代に、宇宙の魂の中に眼醒めてゐる未知のものの量を限定することになるかもしれません。彼は己の思想の方式以上を、自分の「進歩」への歩みの註釈以上を、あたへることになるかもしれません！並外れたものが規範となつて、世のすべての人々に鵜呑みにされて、詩人は真実に進歩の乗数となることでせう！

かかる十九世紀のランボオのフランス語が同時に神の言葉であり、langage universel であること、de l'âme pour l'âme の言葉であること、alchemy du verbe といふのである。だから本来、ランボオの詩は、もはや単なる vieillerie poétique ではなかつたはずである。

Cf. *Délires* II, P. 55.

La vieillerie poétique avait une bonne part dans mon alchimie du verbe.

俺の言葉の錬金術で、かなりの部分を占めてゐたものは、凡そ詩作の陳腐な古物だ。

Cf. *Les Soeurs de charité*.

Mais la noire alchimie et les saintes études
Répugnent au blessé, sombre savant d'orgueil;

Il sent marcher sur lui d'atroces solitudes.
Alors, et toujours beau, sans dégoût du cercueil.

だが陰鬱な錬金術も神聖な研鑽も、
傷いた彼、この暗い傲慢な学徒にはそぐはない。
彼は感じる、兇暴な孤独が己れの上を歩き廻るのを、
かくてなほ、常に穩かに、茫漠たる最後の日の、
棺を厭ふ気配もなく、……

Cf. *Voyelles*.

U, cycles, vibrations divins des mers virides,
Paix des pâtes semées d'animaux, paix des rides
Que l'alchimie imprime aux grands fronts studieux;

U、天体の週期なり、蒼海原の神さびし揺蕩、
点々と家畜の散りばふ 牧の平和、学究の
広き額に 煉金の秘法の刻む 小皺の平和。

かかる alchimie du verbe は、*Délires* II, P. 55 の

Puis j'expliquai mes sophismes magiques avec l'hallucination
des mots!

それから俺は、俺の魔法的詭辯を言葉の幻想をもって説明したのだ。

といふことは、hallucination des mots の様相をさびしめるわけである。それを最も端的に示したものが *Les Illuminations* である。

たといへよう。かかる世界こそ、最も私的個別的 *individuel* なるが故にこそ、最も普遍妥当なる具体的思考の世界であったともいへるものであった。

なほ、この *alchimie du verbe* は、*chacun* *farce* の条に述べたやうに (Cf. *Mauvais Sang*, P. 28.)、また *Délires II*, P. 60 の

Aucun des sophismes de la folie, — la folie qu'on enferme, — n'a été oublié par moi : je pourrais les redire tous, je tiens le système.

錯乱の、——秘められた錯乱の——数々の詭辯は、どれ一つとして俺は忘れなかった。残らずぶちまけることだって出来る。からくりの糸はしっかり握っている。

といつてゐるやうに、自らは自己の世界の外に立って傍観者乃至は観察者の立場においての、知的操作の一つとして可能になるものであった。

A moi. L'histoire d'une de mes folies.

聞き給へ。この物語も、数々の俺の狂乱の一つなのだ。

この *folies* は、もろもろ既述のうへに *délires*, *désordre* と軌を一にする言葉で、*le monde* の立場から見つゝの *folies* であり、この *folies* はランボオの世界へ至るための必須の *processus* であつたわけである。聖なる世界への道程としての *folies* である。

Cf. *Délires II*, P. 55.

Je finis par trouver sacré le désordre de mon esprit.

この精神の乱脈も、所詮は神聖なものと俺は合点した。

また、かかる聖なる神の世界は、一切の存在の根拠としての根源的世界であるが故に、必然的にかかる *folies* はすべての人が、意識すると否にかかはらず、本来的に蔵してゐるといつゝの *folies* であつたのである。

Cf. *Délires II*, P. 60.

A chaque être, plusieurs autres vies me semblaient dues. Ce monsieur ne sait ce qu'il fait : il est un ange. Cette famille est une nichée de chiens. Devant plusieurs hommes, je causai tout haut avec un moment d'une de leurs autres vies. — Ainsi, j'ai aimé un porc.

Aucun des sophismes de la folie, — la folie qu'on enferme, — n'a été oublié par moi : je pourrais les redire tous, je tiens le système.

それぞれの存在には、幾つかの他の生活があるべきもののやうに俺には思はれた。この男は自分の為てゐる事が自分に解らないが、彼奴〔彼〕は天使である。あの家族ときたら〔あの家族は〕、乳離れもない仔犬共の一团だ。俺は人々の眼の前で、その人々の他の生活中の或る生活の一瞬間と、大きな声で喋つたものだ。——かうして、俺には豚が可愛くなつたのだ。

錯乱の、——秘められた錯乱の——数々の詭辯は、どれ一つとして俺は忘れなかった。残らずぶちまけることだって出来る。からくりの糸はしっかり握っている。

誰しも、人が、根底に蔵してゐる *folie* である (*la folie qu'on*

enferme)。やむを得ず 同六十頁で

je vis que tous les êtres ont une fatalité de bonheur :

俺はすべての存在が、幸福の宿命を持つてゐるのを見た。

とつひ O Saisons, ô Châteaux で

J'ai fait la magique étude

Du Bonheur, que nul n'élude.

私の手がけた幸福の

秘法を誰が脱れ得よう。

といつてゐるやうに、神の世界の Voyant であること、神の国に安住するに基く Bonheur は、すべての人の fatalité であつたのである。それはランボオ的な神の世界こそ一切の存在の根柢の世界であつたからである。ところが、この folies が、一切の存在の根柢としてのランボオの神の世界へ至るための必須の processus であるとすれば、この folies もやむを得ず la folie qu'on enferme とつひやうに、すべての人が根柢に蔵するところのものであるわけである。

folie はかかゝる意味での folie であつたのだが、しかしまた、それはこの processus によって、ランボオの窮極の世界、innocence, néant, nature の世界に到達するためには ennui, mort とともに超克されねばならぬものであつたのである。いはば folie はランボオの世界の否定的往相面を指すものなのである。folie は ennui, mort と同次元の世界であつたといふやう。

Cf. Mauvais Sang, P. 27.

L'ennui n'est plus mon amour. Les rages, les débauches, la

folie,——dont je sais tous les élans et les désastres,——tout mon fardeau est déposé. Appréciations sans vertige l'étendue de mon innocence.

倦怠はもはや俺の愛する処でない。忿怒と放蕩と愚行、——俺はその躍動も災禍も全て知つてゐる、——あらゆる俺の重荷はすたれた。俺の無垢潔白〔イノセンス〕の領域を、心を据ゑて批判してみよう。

Une Saison en Enfer, P. 8 で

Je me suis séché à l'air du crime.

罪業の風に身は干涸らひた。

とつひ Nuit de l'Enfer, P. 44 で

Oh! ces jours où il vent marcher avec l'air du crime.

ああ、この頃と来たら、あゝは罪をひけらかして歩かうとしてゐるのです。

といつてゐるやうに、folie は l'air du crime になつてゐる往相面に出来た世界であつたのである。だから、Nuit de l'Enfer, P. 36 で

——Et pensons à moi. Ceci me fait peu regretter le monde.

J'ai de la chance de ne pas souffrir plus. Ma vie ne fut que folies douces, c'est regrettable.

——扱て、俺一人の身を考へてみても、先づ此の世には未練はない。仕合せな事には、俺はもう苦しまないで済むのだ。俺の生活とは優しい愚行〔狂気〕のつながりに過ぎなかつた。それが残念だ。

といふわけである。還相行における、単なる否定的往相面に対する反省である。

Depuis longtemps je me vantaïs de posséder tous les paysages possibles, et trouvais dérisoires les célébrités de la peinture et de la poésie moderne.

俺は久しい以前から、可能なかぎりの風景を擲んでゐるのが自慢だった、近代の詩や絵画の大家共は、俺の眼には馬鹿々々しかった。

posséder tous les paysages possibles とは、ランボオ的世界、往相即還相、還相即往相なる、néantの現成としての natureの世界において、一時一時の一事一事が即永遠であり、絶対であり、神の現成であり、その意味において、手にふれ耳にふれ目にふれる一切が、森羅万象が詩の世界であつたことを意味するのであらう。

Cf. O Saisons, ô Châteaux.

O saisons, ô châteaux,

Quelle âme est sans défauts?

季節が流れる、城塞が見える、

「おお、季節よ、おお、城よ、」

無疵な魂なぞ何処にあらう。

Cf. Bannières de Mai.

Qu'on patiente et qu'on s'ennuie

C'est trop simple. Fi de mes peines.

Je veux que l'été dramatique

Me lie à son char de fortune.

Que par toi beaucoup, ô Nature,

地獄の一季節註解

——Ah moins seul et moins null——je meure.

.....

Je veux bien que les saisons m'usent.

A toi, Nature, je me rends;

Et ma faim et toute ma soif.

Et, s'il te plaît, nourris, abreuve.

.....

やれ忍耐だの退屈だのと、

芸もない話ぢやないか！.....チェツ、苦勞とよ

「チェツ、俺の苦しみもばかばかしい、」

ドラマチックな夏こそは「夏が」

『連』の車にこの俺を、縛ってくれるでござよう、（縛ってくれる

やうに、）

自然よ、おまへの手にかかり、

——ちつとはまじに賑やかに、死にたいものだ！

.....

季節々々がこの俺を使ひ減らしてくれればいい。

自然よ、此の身はおまへに返す、

こんな渇きも空腹も。

お氣に召したら、食はせろよ、飲ませろよ。

.....

Cf. Solde.

Les richesses jaillissant à chaque démarche! Solde de

diamants sans contrôle!

歩むに従って、迸り出る様々な富。無統制のダイヤモンドの投売り。

Cf. Génie.

O fécondité de l'esprit et immensité de l'univers!

おお、精神の豊富と宇宙の廣大無辺。

Cf. A une Raison.

Arrivée de toujours, qui t'en iras partout.

幾時じゆゑも来たお前は、何処へでも行くだらう。

Cf. Guerre.

A présent l'inflexion éternelle des moments et l'infini des mathématiques me chassent par ce monde où je subis tous les succès civils, respecté de l'enfance étrange et des affections énormes.....

C'est aussi simple qu'une phrase musicale.

扱て今、様々な瞬間の永遠の屈折と数学の無限とが、俺をこの世界の中に駆りたてる。そして其処に、俺は奇怪な少年時と途轍もない愛情とに敬はれて、市民としてのあらゆる成功を受けてゐる。……

音楽の一楽節の様に埒もない。

つづれも前掲 O Saisons, ô Châteaux と同じ様に、目に見るやうに、耳にきこえるやうに、一切が神の現成である、神の現成であるかぎり、一切が詩の世界でもあるとするランボオ的思考より出る言葉である。したがって、“至り得、還り来れば別事なし”であって、その別事なき一切

が即神の世界であるやうな語った Veillées, I のやうな詩がみられるわけである。

Cf. Veillées, I.

C'est le repos éclairé, ni fièvre ni langueur, sur le lit ou sur le pré.

C'est l'ami ni ardent ni faible. L'ami.

C'est l'aimée ni tourmentante ni tourmentée. L'aimée.

L'air et le monde point cherchés. La vie.

——Était-ce donc ceci?

——Et le rêve fraîchit.

明るく休息だ、熱もなく、けだるさもなく、寝台の上に、草原の上で。

友は、烈しくもなく、弱くもない男。友よ。

愛人は苦しみもせず、苦しめられもせぬ女。愛人よ。

求められたのではない空気とこの世と。生活。

——では、やっぱりこれだったのか。

——さうして夢は風が吹きつゝの。

かくつゞや、posséder tous les paysages possibles など得々わびあへ。まだ、luxes oisifs (Jeunesse, IV.), luxe inouï (Phrases), futur luxe nocturne (Vagabonds) など、まだ toutes les richesses flambant (Mauvais Sang, P. 23.) など、richesses inouïes (Vies, I.) などともいふ所以である。

しかも、かかる世界が否定の媒介を必須とするものであるが故に、そ

価値の顛倒を生じ、et trouvais dérisoires les célébrités de la peinture et de la poésie moderne など所以である。したが、Voyant としての必然的結果としてある。ランボオの Nature の世界、Barbare の世界が出たのである。ボエジーは行動の韻律化ではなく、先駆するものだから Voyant の手紙にも照応するものである (La Poésie ne rythmera plus l'action; elle sera en Avant!)。les célébrités の世界は、所詮は「行動の韻律化」に過ぎなかったのである。それは真の芸術としての peinture, poésie ではないのである。

J'aimais les peintures idiotes, dessus de portes, décors, toiles de salimbanques, enseignes, enluminures populaires; la littérature démodée, latin d'église, livres érotiques sans orthographe, romans de nos aïeules, contes de fées, petits livres de l'enfance, opéras vieux, refrains niais, rythmes naïfs.

俺は白痴のやうな絵を愛してゐた、欄門ランモンの飾、舞台の背景、辻芸人の辻びら、看板、絵草紙を。又、時代遅れの文学を俺は愛した。教会のラテン語を、誤字だらけの好色本を、俺達祖先の物語を、妖精の作嘶ルンランを、少年時代の豆本を、古めかしいオペラを、愚にもつかない畳句や、他愛ないリズムを愛した。

冒頭は l'histoire d'une de mes folies などであるが、この世界が le monde の否定を媒介として、délires, désordre, folies の

一面をもつてであり、価値の顛倒を来してゐるのである。そして Les peintures idiotes……のうたものが出てきたのである。

ランボエがらむる les peintures idiotes……のとき世界は、le monde の価値の立場から見れば、愚にもつかない、一顧の価値すらなきものとして捨て去られるべきものであらうが、かかる世界こそ、むしろ人類のはからむを超えた une brute の世界。

Cf. Mauvais Sang, P. 23.

je suis une brute.

俺は一個の禽獣なのだ。〔俺は、生れたままの人間なのだ。〕

Cf. Mauvais Sang, P. 20.

l'abrutissement simple.

単純な愚鈍。

におけるものとして、Nature の嬰孩行に近い世界ともいへるであらう。もちろん、これらが、多分に、直接的融合の世界であり、否定を媒介とする néant の現成としての Nature, innocence の世界とは直ちに同一とはいへないとしても、近接するものであり、ランボオが、Antique, Barbare の世界に己が世界の具現をみて、終生それへの憧憬やみがたきものがあつたことと直接に関係をもつ言葉であり、したがって、これらは、けっして抽象的観念の世界ではなく、ランボオの身心に訴へて、しみとほつてゐた世界であつたと考へられる。近代文芸、近代芸術が忘れ去らうとしてゐる根源的文芸、芸術の一つの相を示すものといふよう。

Cf. Vagabonds.

J'avais en effet, en toute sincérité d'esprit, pris l'engagement de le rendre à son état primitif de fils du Soleil,—et nous errions, nourris du vin des cavernes et du biscuit de la route, moi pressé de trouver le lieu et la formule.

実際俺は、心から真面目に、兄貴を太陽の子の原始の姿に、連れ返してやらうと請合つてゐたのであった。——そして二人は、洞窟の酒をのみ街道のビスケットを噛って、放浪した、俺はといへば、空間と公式とを見出さうとあせりながら。

その他、Antique; Barbare; Michel et Christine; 等々参照。

les peintures idiotes ばやひの idiots は、前にも述べたやうに (Cf. Délires I. P. 48.) それを le monde の否定の世界を意味する言葉である。したがって les peintures idiotes によつて前記の les célébrités と次元を異にした、根源的世界に出る peintures を意味するわけである。

romans de nos aïeules, contes de fées, petits livres de l'enfance 等は、おそろへランボオが少年時代シャルヴィルの家乃至は図書館等で実際に目に見、耳に聴いた数々のものであらうと思はれる。それから来る数々の images が彼の作品の所々に点綴せられてをり、特に Les Illuminations に現はれていへる visions, images は大なり小なり、これらのものと趣つをもちつゐるやうに思はれる。

Cf. Mauvais Sang, P. 13.

J'ai de mes ancêtres gaulois l'oeil bleu blanc, la cervelle étroite, et la maladresse dans la lutte. Je trouve mon habille-

ment aussi barbare que le leur. Mais je ne beurre pas ma chevelure.

Les Gaulois étaient les écorcheurs de bêtes, les brûleurs d'herbes les plus ineptes de leur temps.

白碧の眼と、小さな脳味噌と、喧嘩の拙さとを、俺は祖先のゴオル人たちから承け継いだ。この服装にしたって、彼等なみの野蠻さだ。まさか髪の毛にバタをなすりはしないが。

ゴオル人とはその当時最も不器用な野獣の皮の剥ぎ手であり、草を燎くのも下手な人種だった。

Cf. Mauvais Sang, P. 15.

Je me rappelle l'histoire de la France fille aînée de l'Eglise.....

Je suis assis, lépreux, sur les pots cassés et les orties, au pied d'un mur rongé par le soleil.—Plus tard, reître, j'aurais bivouqué sous les nuits d'Allemagne.

Ah! encore: je danse le sabbat dans une rouge clairière, avec des vieilles et des enfants.

俺は教会の長女たるフランスの歴史を想ひ起す。……太陽に蝕まれた壁の下で、破れた壺やいらくその上に、俺は癪を病んで坐つてゐる。——それから後に、中世紀の騎兵となつて、ドイツの夜々を、野営に明かしたかも知れない。

ああ、まだある。俺は老婆や子供と手をつないで、赤く染った森の空地に、魔法使の夜宴を踊つてゐる。

その他参照。

Je rêvais croisades, voyages de découvertes dont on n'a pas de relations, républiques sans histoires, guerres de religion étouffées, révolutions de mœurs, déplacements de races et de continents : je croyais à tous les enchantements.

俺は夢みてゐた、十字軍、何の記録もない探検旅行、歴史を持たぬ共和国、抑圧された宗教戦争、風俗の革命、種族と大陸との移動。俺はあらゆる妖術〔歓喜〕を信じてゐた。

ここはランボオにおける宗教革命、ランボオ的世界、神の世界の発見、建設、それに基づく戦ひ、習俗の変革、いはば人間革命変革を想ひみてるたことを語つてゐるわけである。ランボオの *le monde* の否定、近代ヨーロッパの否定は窮極において、キリスト教の神ならぬ神の世界の建設を目ざすものであり、根源の世界への還帰を志すものであり、その processus とつての戦ひであつたのである。

Je rêvais とつてゐるが、特に *Les Illuminations* が示してゐるやうに、ランボオ的世界が、単なる論理として語られてゐるのではなく、常に数々の *images* をもつて語られ、思考せられてゐることに基くものであり、また一つには、ここでは窮極の到達点に至る前の段階として回顧的に語つてゐることに基くものであり、さらには、*Nuit de l'Enfer* や *Bottom* その他が示してゐるやうに、墮地獄の一時を常にまねがれることができず、神の世界における安住歓喜と、いはばなひ合せをまねが

れなかつたことに基く表現であると考えられる。

Cf. *Vagabonds*.

Je créais, par delà la campagne traversée par des bandes de musique rare, les fantômes du futur luxe nocturne.

俺は、類稀なる音楽の楽隊に貫かれた平野の彼方に、夜の未来の栄耀の幻を創造してゐたのだ。

Cf. *Guerre*.

Je songe à une Guerre, de droit ou de force, de logique bien imprévue.

俺は、権利の、或は、力の、全く思ひもよらぬ理論の『戦』を夢みるのだ。

croisades は上記の意味での *le monde* の否定、近代ヨーロッパの否定を媒介とするランボオの神の世界の建設を意味する言葉である。

そして *croisades* は、また同時に *voyages de découvertes* にあつたわけである。それはキリスト教の世界にも、近代ヨーロッパにも、フランスの歴史の中にも、かつてなかつたランボオの神の世界の発見をめづつての旅であつたからである。

Cf. *Mauvais Sang*, P. 15—P. 17.

Si j'avais des antécédents à un point quelconque de l'histoire de France!

Mais non, rien.

.....

La science, la nouvelle noblesse! Le progrès. Le monde

marche! Pourquoi ne tournerait-il pas!

等等。

C'est la vision des nombres. Nous allons à l'Esprit.

フランスの歴史を探ってみて、何処かにこの俺の身元が見付かったなら。

いや、いや、そんなものは無い。

.....

科学、新興の貴族。進歩だ。世界は進行する。何故逆戻しないのだらうか。

これが多数の幻想である。俺達は『聖霊』に行きつくのだ。

だから、ランボオはかかる自己の行程を、しばしば、voyage をもって表現してゐる。

Cf. Mouvement.

L'énorme passage du courant

Mènent par les lumières inouïes

Et la nouveauté chimique

Les voyageurs entourés des trombes du val

Et du strom.

etc., etc.

潮流の巨大な通過が、

不可思議な光線と

化学の新しいことによって

谷の竜巻と流の竜巻とに囲まれた

旅行者たちを運搬する。

しかも、その旅は正に前代未聞の世界の発見・発明の旅であったのである。

Cf. Vies, II.

Je suis un inventeur bien autrement méritant que tous ceux qui m'ont précédé; un musicien même, qui ai trouvé quelque chose comme la clef de l'amour.

俺は、すべての先人達に比べては、全く違った貢献をした一発明者だ。恋愛〔愛〕の鍵とでもいふやうな或ものを発見した音楽家だと言つてもいい。

Cf. Mouvement.

Et l'héroïsme de la découverte.

発見のヒロイズム。

Cf. Délires I. P. 43.

《Il dit : 《Je n'aime pas les femmes. L'amour est à réinventer, on le sait. Elles ne peuvent plus que vouloir une position assurée.....》》

『あれは申します、俺は女なんか愛してはゐない。恋愛といふものは、承知だらうが、でっち上げるものなんだ。〔わかってるだらうが、愛は再発明せられるべきものなのだ。〕女どもは身のきまりがつけ度いと思ふだけで精々だ。〔安定した位置を得たいと思ふだけで精々だ。〕.....』

Cf. Vagabonds.

guerres de religion étouffées : —

それは「掲 Guerre にさうい」"Je songe à une Guerre, de droit ou de force, de logique bien imprévue." とういふをさうい、le monde の否定を媒介とする戦ひであり、その戦ひはキリスト教の神ならぬランボオの神の世界の建設をめづつての戦ひである。正にそれは guerre de religion であつたのである。——ランボオにおける Vérité, Eternité, Pureté, Dieu, Amour, Salut 等の諸項に関する条 参照。——Génie はかかるランボオの神の国における神について語つてゐるのである。そこに展開せられる世界が néant の現成としての Nature の世界であり、森羅万象即神の現成なる O Saisons, ô Châteaux の世界であり、それは同時に amour divin の行ぜられる世界であつたのである。

しかも、この guerre de religion は、それが Délires I が語つてゐるやうに、le monde との間に絶対の断絶をもって距てられた世界であり、かつ、キリスト教の世界とも異質的な宗教的世界である故に、étouffées であつたやうなものがれないわけだ。

révolutions de mœurs : —

Cf. Délires I, P. 45.

Je reconnaisais, — sans craindre pour lui, — qu'il pourrait être un sérieux danger dans la société. — Il a peut-être des secrets pour *changer la vie*? Non, il ne fait qu'en chercher, me répliquais-je.

あれの身の為に恐れるのではなく、——兎も角、あれは社会にとつ

て大変な危険人物であらうと、解りました。——この人は多分人、世を變へる秘密を持つてゐるのでせうか。いやいや、ただそれを搜してゐるだけだ、と妾は考へ直しました。

Cf. Délires I, P. 47.

Par instants, j'oublie la pitié où je suis tombée : lui me rendra forte, nous voyagerons, nous chasserons dans les déserts, nous dormirons sur les pavés des villes inconnues, sans soins, sans peines. Ou je me réveillerai, et les lois et les mœurs auront changé, — grâce à son pouvoir magique, — le monde en restant le même, me laissera à mes désirs, joies, nonchances.

時々妾はこの身の陥り込んだ同情をうっかり忘れて了ふのです。あれは妾を強くしてくれるだらう、二人して旅をしよう、無人の境に狩をしよう、見知らぬ街々の舗石の上に、なげやりに苦もなく寝てしまはう、などと。或はまた、眼が覚めてみると、——あれの魔法の御蔭で、——世の掟も習はしも屹度變つてゐるだらう、この世は變つてゐなくても、妾の希ひや、歡びや、暢気さの邪魔するものはあるまい。

ランボオの世界の窮極の到達点が innocence であり、それが分別悟性の立場、科学の世界、道徳、世俗の一切合財の否定を媒介とするものであり、無一物、無求に身を処し、流転の世界が展開せられ、一時一時の一事一事に神の現成を行じていく世界であるから、当然そこに révolutions de mœurs が起るわけである。ランボオの晩年の放浪も、その一面を示すものといつてよいであらう。

Cf. Conte.

Un Prince était vexé de ne s'être employé jamais qu'à la perfection des générosités vulgaires. Il prévoyait d'étonnant révolutions de l'amour, et soupçonnait ses femmes de pouvoir mieux que cette complaisance agrémentée de ciel et de luxe. Il voulait voir la vérité, l'heure du désir et de la satisfaction essentiels.

或る『王子』が、かへりみれば、ただただ何の奇もない贅沢三昧に、日を暮して来た事を思つてむかむかした。彼は恋愛〔愛〕の驚く可き革命を予見してゐた、そして妻妾達〔女ども〕には、お天気と裝飾とに甘やかされた喜び以上のものは、一体が無理ではないのかと考へてゐた。彼は眞実が見たかった、本質的な慾望と満足との時が得たかった。

かへりみれば、それが、vérité に基へ essentiels な désir と satisfaction とを与へるものである故に、かかる moeurs の革命は、最も眞実なる人間像が、そこに具現せられるべきはずのものである。

déplacements de races et de continents : —

かかる否定的轉換、révolutions de moeurs は、いかなる déplacements de races et de continents にもなつた。

Cf. Génie.

Son pas! les migrations plus énormes que les anciennes invasions.

彼の歩み。古代人の侵寇よりも巨大な移住。

具體的に、Occident なる Orient への déplacement を語るものではない。

Cf. L'impossible, P. 70.

L'humanité se déplace, simplement. Vous êtes en Occident, mais libre d'habiter dans votre Orient, quelque ancien qu'il vous le faille,—et d'y habiter bien. Ne soyez pas un vaincu. Philosophes, vous êtes de votre Occident.

人類が単に場所を變へるだけだ。あなたは西洋にゐる、だが、あなたがあなたの東洋に住むのは御自由だ。——どんなに古代であらうと自由だし、——また手際よく住むことだって御自由だ。負けてはいけない。哲学者共よ、君等は君等で西洋種だ。

近代ヨーロッパは marais occidentaux (Cf. L'impossible, P. 68.) であつたのと同じく、Orient は sagesse éternelle が見出た、la patrie primitive (Cf. L'impossible, P. 70.) が見出たのである。ラッポオの世界の具現は、それは Orient の sagesse の世界であり、Occident の Orient への否定的轉換であつたのである。

かかる croisades, voyages de découvertes dont on n'a pas de relations, républiques sans histoires, guerres de religion étouffées, révolutions de moeurs, déplacements de races et de continents は、それらのもたらす結果、到達点は、すべて enchantements である。何故なら、その一切の人間の苦悩は解脱せられ、それにこそ眞に安住するところだ。その一切の何物にせよ、いつもゆるゆるのなう fatalité としての Bonheur の世界が展開せられ、Délices の

世界が展開せられるわけだからである。がなほ、ランボオにおいては enchantements には常に苦悩行はまぬがれなかったのであり、苦悩の中の délices は最も具体的な歓喜があったのであるが、

Cf. Nuit de l'Enfer, P. 34.

Plus tard, les délices de la damnation seront plus profondes.

後になれば、地獄の責苦の甘味の味も一層深くなるだろう。

具体的段階に到達するまでの、前の段階と同じ rêver, croire の域にあるという語っているわけである。だから、Délires II, P. 61 で

Je dus voyager, distraire les enchantements assemblés sur mon cerveau. Sur la mer, que j'aimais comme si elle eût dû me laver d'une souillure, je voyais se lever la croix consolatrice. J'avais été damné par l'arc-en-ciel. Le Bonheur était ma fatalité, mon remords, mon ver : ma vie serait toujours trop immense pour être dévouée à la force et à la beauté.

俺は旅をして、この脳髓に集り寄った様々な呪縛〔歓喜〕を、戒つて了はねばならなかった。俺は海を愛した、この身の穢れを洗ひ落してくるのは海だったに相違ない。俺は海上に慰安の十字架の昇るのを見た。俺は虹の橋によって地獄に墮してしまったのだった。『幸福』は俺の宿命であった、悔恨であった、身中の虫であった。幾時になっても、俺の命は、力や美に捧げられるにはあんまり大き過ぎるかも知れない。

といっているのである。頭に歓喜の世界が描かれてくるから、fatalité と同じの Bonheur の世界は現成するべくもなかったからである。O Saisons, ô Châteaux の世界は展開せられるべくもなかったからである。一歩一歩行ずる O Saisons, ô Châteaux の世界は、もはや頭の中に描かれた歓喜の世界ではなかったからである。

J'inventai la couleur des voyelles!—A noir, E blanc, I rouge, O bleu, U vert.—Je réglai la forme et le mouvement de chaque consonne, et, avec des rythmes instinctifs, je me flattai d'inventer un verbe poétique accessible, un jour ou l'autre, à tous les sens. Je réservais la traduction.

Ce fut d'abord une étude. J'écrivais des silences, des nuits, je notais l'inexprimable. Je fixais des vertiges.

俺は母音の色を発明した。——A は黒、E は白、I は赤、U は緑。——俺は子音それぞれの形態と運動とを規整した、そして、本能的な律動をもって、幾時かはあらゆる感覚に近づき得る詩的言辭を発明するぞと己惚れたのであった。俺は翻譯を保留した。最初は習作〔研究〕だった。俺は沈黙を書き、夜を書き、描き出す術もないものを書きとめた。俺は様々な眩暈を定著した。

J'inventai la couleur des voyelles!—A noir, E blanc, I rouge, O bleu, U vert : ——

Cf. Voyelles.

A noir, E blanc, I rouge, U vert, O bleu : voyelles,
Je dirai quelque jour vos naissances latentes :

A, noir corset velu des mouches éclatantes

Qui bombinent autour des puanteurs cruelles,

Golfes d'ombre; E, candeurs des vapeurs et des tentes,

Lances des glaciers fiers, rois blancs, frissons d'ombelles;

I, pourpres, sang craché, rire des lèvres belles

Dans la colère ou les ivresses pénitentes;

U, cycles, vibrations divins des mers virides,

Paix des pâtis semés d'animaux, paix des rides

Que l'alchimie imprime aux grands fronts studieux;

O, suprême Clairon plein des strideurs étranges,

Silences traversés des Mondes et des Anges :

——O l'Oméga, rayon violet de Ses Yeux!

Aは黒、E白、I赤、U緑、Oは藍色、

母音よ、汝が潜在の誕生をいつか 我は語るむ。

A、無慙なる悪臭の周囲に唸りを立てて飛ぶ

燦めく蠅の 毛斑の 黒き胸当

日陰の入江。E、靄と天幕の あどけなき

傲然たる氷河の槍尖、真白き光芒、繖形花の顫動。

I、真紅、吐かれし血、悔悛の陶酔か

はた 憤怒の中の 美しき唇の哄笑。

U、天体の週期なり、蒼海原の神さびし揺蕩、

点々と家畜の散りばふ 牧の平和 学究の

広き額に 煉金の秘法の刻む 小皺の平和。

O、奇怪の鋭き叫びの満ち溢てる 至上の喇叭、

大千世界と天使とを 貫ける沈黙よ。

——おおオメガ、かの人の眼の紫の光線。

これは couleur と son との間におけるモダリタ現象の把握を示す

ものであり、Ch. Baudelaire になける Correspondance の “Les parfums, les couleurs et les sons se répondent” と共通の現象に関するものである。かかるモダリタを異にするものの間の correspondance

の発見自覚にサンボリスムが発したものであり、それはまた、概念、

論理を超えた世界の現象、不思議底の世界に連るものであったのである。

かくて、ランボオが Voyelles なる詩をものしたといふことは、ラン

ボオ的世界が、le monde の否定、delires の出発、そして croisades であり、voyages de découvertes、et républiques sans histoires

の探究であり、guerres de religion étouffées であり、révolutions de moeurs であり、déplacements de races et de continents であり、すものであったこと、しかもキリスト教的世界ではないランボオの神の世界であったこと、そしてそれは当然、言語を超え、概念を超え、思量を超えた実践的行為の世界であったことと必然的に連ることであり、この la couleur des voyelles の発見といふことは、ランボオの世界に連る事柄は、langage universel の發明発見の一環として考へられるべき事柄であったのである。

したがってランボオにおける、かかる la couleur des voyelles の発見といふことは、単なる好事家の仕事でもなければ、単なる思ひつきに過ぎないものである。Voyelles の中へ、paix des rides/Que l'alchimie imprime aux grands fronts studieux といふてゐるやうに、ランボオ的思索論理に基づく langage universel の發明発見といふの Alchimie du verbe の結果であり、このすぐ後で、je me flattais d'inventer un verbe poétique accessible, un jour ou l'autre, à tous les sens といふのである。それは un verbe poétique accessible à tous les sens であること alchimie du verbe であつたのである。

また、ランボオの作品において、色彩を現はす語は、事実、今まで度々ふれてきたやうに、単なる色彩語ではなく、大抵の場合象徴的意義が附与せられてゐるのである。たとへば bleu, blanc (Mauvais Sang, P. 13, etc., etc.); jaune, vert (Bateau ivre, etc., etc.); rouge, noir (Mauvais Sang, P. 23, etc., etc.) のやうに。

Je réglai la forme et le mouvement de chaque consonne, et, avec des rythmes instinctifs, je me flattai d'inventer un verbe poétique accessible, un jour ou l'autre, à tous les sens : ——
この条については同然である。ランボオの alchimie du verbe を語つてゐるのである。

Cf. Ville.

Je suis un éphémère et point trop mécontent citoyen d'une métropole crue moderne parce que tout goût connu a été éludé dans les ameublements et l'extérieur des maisons aussi bien que dans le plan de la ville. Ici vous ne signaleriez les traces d'aucun monument de superstition. La morale et la langue sont réduites à leur plus simple expression, enfin!

むき出しの近代首府の市民として、この俺は、どうせ束の間の滞留だし、大した不平があるわけもない、何故なら、知られてゐた全ての趣味は、家の外形にも、室内の家具にも、さては、街のプランのなかにまでも、すっかり姿をひそめてしまったからだ。此処では、迷信の墓碑の跡形を、君達は大した一つも見せてはくれまい。道徳も言葉も、たうとう、その最も単純な表現に還元されて了つた。

といつてゐるやうに、近代ヨーロッパ、Occident の世界、le monde には、根源的世界は影をひそめ、言語も根源的世界からは游離してしまつたと見てゐるのである。そこに再び、言語を根源的世界に対応するものとして、根源的世界を語るに堪えるものとして復活せしめるために alchimie du verbe が要求せられたのである。

Cf. Lettre à Paul Demény, du 15 mai, 1871.

Donc le poète est vraiment voleur de feu.

Il est chargé de l'humanité, des ANIMAUX même; il devra faire sentir, palper, écouter ses inventions. Si ce qu'il rapporte de LAS-BAS a forme, il donne forme; si c'est informe, il donne de l'informe. Trouver une langue!

—Du reste, toute parole étant idée, le temps d'un langage universel viendra! Il faut être académicien——plus mort qu'un fossile,——pour parfaire un dictionnaire, de quelque langue que ce soit. Des faibles se mettraient à PENSER sur la première lettre de l'alphabet, qui pourraient vite ruer dans la folie!——

Cette langue sera de l'âme pour l'âme, résument tout, parfums, sons, couleurs, de la pensée accrochant la pensée et tirant. Le poète définirait la quantité d'inconnu s'éveillant en son temps dans l'âme universelle: il donnerait plus——que la formule de sa pensée, que la notation de SA MARCHE AU PROGRÈS! Énormité devenant norme, absorbée par tous, il serait vraiment un MULTIPLICATEUR DE PROGRÈS!

それ故詩人とは真に火を盗む者であります。

彼は人類や、動物たちにもまでも責を負つてゐるのです。彼は自分の発明したものを感じさせ、手に触れさせ、それに耳を傾けさせねばならぬでせう。もしも彼が彼岸から持ち来るものが形のあるものであれば、

ば、彼は形をあたへます。もしそれが無形であれば、彼は無形のものにあたへるのです。言語を見出すことです。——

その上、一切の言葉が觀念であるからには、世界言語の時代が来るにせう!それがどのやうな言語であるにせよ、辞典を完璧にするなどと言ふことは、——化石よりも死物化した——アカデミシャンでもなければ出来ません。弱者はアルファベットの最初の文字について思索を始め、としても、たちまち気がふれてしまふかもしれません!

このやうな言語は、魂のために魂からほとばしるものであらうし、一切を、勾ひも、音も、色も、その裡に要約してをり、思想を獲得しつつ、身に引きつける思索から出たものであります。詩人はその当代に、宇宙の魂の中に眼醒めてゐる未知のものの量を限定することになるかもしれない!彼は己の思想の方式以上を、自分の「進歩」への歩みの註釈以上を、あたへることになるかもしれない!並外れたものが規範となつて、世のすべての人々に鵜呑みにされて、詩人は真実に進歩の乗数となるにせう!

かく、alchimie du verbe, langage universel の理想、それに基く母音の音色の研究、子音の規制、リズムの構成も、すべてランボオ的思索研究から出てきたものであり、Voyantとしての認識に基くものであったが、かかる意味での言語の完璧さは要請に止つて実現は不可能であった。Je réservais la traduction という所以である。

Ce fut d'abord une étude: ——

確かに最初は研究であつた。論理の追究を試みてゐるのである。Les

Illuminations の中の数篇には明かに、二即一、一即二、此岸即彼岸、彼岸即此岸、有即無、無即有なる彼の論理が語られてゐるのを見るのである。ただ、その研究の結論が、いはば「見るものなくして見る」実践、一歩一歩の一事一事を介して絶対の現成を行すべき世界であつたが故に、O Saisons, ô Châteaux et Néant, Nature に関する詩篇を生み出したのであり、そのことが、やうに、彼の放浪をももたらしたのである。

Cf. Enfance, IV.

Je suis le savant au fauteuil sombre. Les branches et la pluie se jettent à la croisée de la bibliothèque.

俺は陰鬱な肘掛椅子に靠れた学究。小枝と雨が書斎の硝子窓に打ちつける。

Cf. Mouvement.

Repos et vertige

A la lumière diluvienne,

Aux terribles soirs d'étude.

.....

——On voit,.....leur stock d'études;

研究の恐ろしい夜な夜なに、

大洪水の光をまっ

休息と眩暈よ。

.....

彼等の研究の蓄積を眺めてゐるのだ。

その他、Jeunesse, I, II; Solde; Mouvement 等には、calcul なる語を使つてゐるが、この calcul が、この étude の意味に Voyant をめづつて、Voyant をこの étude に用ゐる。

J'écrirais des silences, des nuits, je notais l'inexprimable.

Je fixais des vertiges : ——

silences をこの nuits をこの inexprimable をこの vertiges をこの、もちろん、それが神の世界、概念を超えた一元絶対の世界、したがって概念的言語をもつてつては表現し得ぬ世界である、この、この (silences, nuits, inexprimable) それは無底の世界、底なき断崖に接するもの、この (vertiges) は、この。かかる世界の何等かの形における表現記述は所詮 silences, nuits, inexprimable を記述する、この vertiges を固着する、この、この。

Cf. Enfance, V.

Je suis maître du silence.

俺は沈黙の主人。

Cf. Angoisse.

Rouler aux blessures, par l'air lassant et la mer; aux supplices, par le silence des eaux et de l'air meurtriers; aux tortures qui rient, dans leur silence atrocement houleux.

転々とつらげ廻るのだ、人を疲れさせる風にのり、海を渡つて、傷口の上を、生命を奪ふ水と風との沈黙の中で、刑罰の上を。兇暴にうねりをあげる沈黙の裡に、嘲笑ふ拷問の上を。

Cf. Mauvais Sang, P. 27.

Appréciations sans vertige l'étendue de mon innocence.

俺の無垢潔白〔イノサメス〕の領域を、心を据ゑて批判してみよう。

Cf. Mouvement.

Repos et vertige

A la lumière diluvienne,

Aux terribles soirs d'étude.

研究の恐ろしい夜な夜なに、

大洪水の光をもつ

休息と眩暈^よ。

☆

Loin des oiseaux, des troupeaux, des villageoises,

Que buvais-je, à genoux dans cette bruyères

Entourée de tendres bois de noisetiers,

Dans un brouillard d'après-midi tiède et vert?

Que pouvais-je boire dans cette jeune Oise,

Ormeaux sans voix, gazon sans fleurs, ciel couvert!

Boire à ces gourdes jaunes, loin de ma case

Chérie? Quelque liqueur d'or qui fait suer.

地獄の一季節註解

Je faisais une louche enseigne d'auberge.

—— Un orage vint chasser le ciel. Au soir

L'eau des bois se perdait sur les sables vierges,

Le vent de Dieu jetait des glaçons aux mares;

Pleurant, je voyais de l'or——et ne pus boire.——

小鳥の群、羊の群、村の娘たちから遠く離れて、

はしばみのやはらかな森に囲まれた

このヒイスの叢の中に膝をつき、

生ぬるい緑の午後の霞の中で、俺は何を飲んだのか。

このオアーズ川の上流で、何を俺が飲み得たか、

—— 榆の若木に声もなく、芝生に花なく、空一面に曇ってゐた——

この黄色い瓢に口をつけ、わが愛の小屋を離れて、

何を飲めたか。肌に汗をかかせる何やら金色の酒〔金の酒〕。

居酒屋のあやしげな看板と、俺はなってるた。

—— 驟雨が空を追払った。日が暮れて、

森の水は清らかな砂の上に消えて行き、

神の風は、沼の面に氷の塊を投げつけてゐた。

泣きながら、俺は黄金を見てゐたが、—— 飲み得なかった。——

八七

本詩は Delahaye の言によれば、ともにシャルルヴィルの郊外を散歩したのを動機とする詩であるが、これも *Délires I* の場合と同様に、(*Délires I* の条、註解参照。) *image* と同じく、その時の *image* が用ひられてゐるとしても、それは単なる、いはば素材としての意味しかもたぬものであり、ここにランボオが語らうとする「詩の世界」は、往相的寂靜の世界であり、——*Enfance*; *Les Soeurs de Charité* と同一の範疇に属すべきものとしての——この世界に結局安住することのできぬことを、この世界が再び否定的に超克されねばならぬことを、現在の立場から回想的に語らうとしてゐるものと言つてよいであらう。

Loin des oiseaux, des troupeaux, des villageoises : ——

これは人里はなれた閑静沈黙を語るものであり、往相的寂靜の世界を示すものである。

oiseaux なる語は、ランボオにおいては死の世界、往相的寂靜の世界の逆方向におけるものとして、有の世界の象徴として語られてゐるのである。

Cf. *Enfance*, IV.

*Les sentiers sont après. Les monticules se couvrent de genêts.
L'air est immobile. Que les oiseaux et les sources sont loin!
Ce ne peut être que la fin du monde, en avançant.*

辿る小道は起伏して、丘陵を金雀枝は覆ふ。大気は動かない。小鳥の歌も泉の声も随分遠くだ。進んで行けば、世界の涯は必定だ。

oiseaux の世界から遠ざかつて行つた、その果てが、*la fin du monde*、

死、寂靜の世界である。

Cf. *Enfance*, III.

Au bois il y a un oiseau, son chant vous arrête et vous fait rougir.

森に一羽の鳥がゐて、その歌が、人の足を止め、顔を赤くさせる。うじうじと *oiseau* は *Nature vivante* (*Soleil et Chair* においては *Nature vivante* は古代原始の世界を意味するが、同時にそれが、有即無、無即有なるランボオ的世界の具現の世界であつたと考へられる。) におけるもの、有即無、無即有としての *Nature* の世界のものと考へてよいであらう。だから往相的寂靜の世界を描く *Enfance* において、その *oiseau* の唄が足を停めさせ、顔を赤らめさせるのである。

Cf. *Soleil et Chair*.

....., il entendait autour

Répondre à son appel la Nature vivante;

Où les arbres muets, bergant l'oiseau qui chante,

La terre bergant l'homme, et tout l'Océan bleu

Et tous les animaux aimaient, aimaient en Dieu!

.....牧羊神は、身近に生々とした大自然が、

自分の呼びかけに応へてくれるのを聴いてゐた。

歌ふ小鳥をゆすぶつて寝かせてける無言の樹々、

人間を静かに愛撫して眠らせる大地、ありとあらゆる青海原、

ありとあらゆる獣類が、神のやうに愛情を示してゐた。

Cf. *Bateau ivre*.

Presque île, ballottant sur mes bords les querelles
Et les fientes d'oiseaux clabauds aux yeux blonds.
Et je voguais, lorsqu'à travers mes liens frères
Des noyés descendaient dormir, à reculons!.....

Or moi, bateau perdu sous les cheveux des anses,
Jeté par l'ouragan dans l'éther sans oiseau,
宛然 島のいとなり、さはれの島 舷に 声甲高き
金色の眼の群鳥の喧噪と糞とを 軽く揺りたり。
なほ漂うてゆくほどに、わが細索を横切りて、
逆に流れて、水死人 眠りに落ち行くものありき……

さて われは颶風によりて 鳥飛ばぬ虚空の中に
投げられて、入江の髪の藻の下に 難破せる船、

Cf. Mémoire, 2.

Les robes vertes et déteintes des fillettes
font les saules, d'où sautent les oiseaux sans brides.

Plus pure qu'un louis, jaune et chaude paupière
le souci d'eau——ta foi conjugale, ô l'Épouse!——
岸の柳は緑の色あせた衣をつけた村娘か、
そこから、小鳥の群は絆もなしに天翔ける。

一ルイ金貨より淨らかに、黄色く燃えた流れの眼瞼
水に咲く金盞花よ——夫婦の誓よ、おお人妻！

Cf. Bottom.

Je me trouvais néanmoins chez Madame, en gros oiseau gris
blen s'essorant vers les moulures du plafond et traînant l'aile
dans les ombres de la soirée.

俺はやつぱり、天井の玉縁に飛びかひ、夜の暗闇に翼を曳く青鼠色
の巨鳥となつて、俺の女（マダム）の家にゐた。

といつてゐるが、この gros oiseau は還相行の象徴であり、示唆するところがある。

上掲諸例が示してゐるやうに、ランボオにおいて oiseau なる語が何等かの意味において有の世界の象徴としての意味を担つてゐるものとすれば、Loin des oiseaux とは、かかる有の世界からの乖離を、したがって死の寂静の世界、往相の世界を意味することとなるわけである。

troupeaux と同じく、上記 oiseaux の場合と同然である。したがつて loin des troupeaux も、同様、死の往相的寂静の世界を意味するわけである。

Cf. Michel et Christine.

Zut alors, si le soleil quitte ces bords!

Fuis, clair dégel! Voici l'ombre des routes.

……………

O cent agneaux, de l'idylle soldats blonds,

Des aqueducs, des bruyères amaigries,

Fuiez! plaine, déserts, prairie, horizons
Sont à la toilette rouge de l'orage!

畜生!太陽はこの国々を見棄てるのか!

逃げろ、大洪水! 道さへ暗くなって来た。

.....

おお百頭の仔羊よ、金髪の牧歌の兵隊よ、

水路橋から、やせたヒースの茂みから

逃げろ! 野も、原も、牧場も、地平線も、

雷雨の真赤なお化粧だ!

太陽が見捨て、le monde の一切に対する否定としての déluge のおそふところより逃れようとしているのである。したがってこの cent agneaux の意は自ら明かである。

villageoises に「これは」の Larme 以外に用例のない語であるが、もちろん oiseaux, troupeaux と同然に考へられるべきであらう。

Que buvais-je : —

これは oiseaux, troupeaux, villageoises から遠く離れた、かかる往相的寂靜の世界に、かつては “Les Soeurs de Charité” におけるやうに、救ひを、安住の世界を求めたのであるが、

O Mort mystérieuse, ô soeur de charité.

神秘的死神、おお、これぞまことの看護修道尼!

今、かかる mort, ennui の超克せられた立場にあって、これを回想すれば、一体そこに何を得るところがあったのであらうか、はたして真理としての安住の世界があったであらうかとの意でいふのである。

Bateau ivre びやうね ivre & sommeil bien ivre sur la grève
(Cf. Mauvais Sang, P. 19.) びやうね ivre “なほちやうび” そいびや
確かに一種の陶酔境があった、extase, cauchemar (Cf. Nuit de l'Enfer, P. 35.) があった。が、今や、それに対して否定的超克の立場に、この回想の意をもちいているのである。

ランボオは往相的世界に対しても、還相的世界に対しても、それを安住の世界と考へる場合に、それに対してしばしば boire, ivre の語、その images を使っている。

Cf. Comédie de la Soif, 1, Les Parents et 3, Les Amis.

1. Les Parents.

Nous sommes tes Grands-Parents,

Les Grands!

Couverts des froides sueurs

De la lune et des verdures.

Nos vins secs avaient du coeur!

Au soleil sans imposture

Que faut-il à l'homme? boire.

MOI.—mourir aux fleuves barbares.

Nous sommes tes Grands-Parents

Des champs.

L'eau est au fond des osiers :

Vois le courant du fossé
Autour du château mouillé.
Descendons en nos celliers;
Après, le cidre et le lait.

MOL.—Aller où boivent les vaches.

Nous sommes tes Grands-Parents,

Tiens, prends

Les liqueurs dans nos armoires;
Le Thé, le Café, si rares,
Frémissent dans les bouilloires.
——Vois les images, les fleurs.
Nous rentrons du cimetière.

MOL.—Ah! tarir toutes les urnes.

一 親

俺達がお前の親なのだ。
お前の爺さん婆さんだ。
お月様と青草の
冷い汗にまみれてさ。
作った地酒にゃ脈がうつ。

地獄の一季節註解

陰日向のない陽を浴びて、
一体人間に何が要る、飲む事を。

俺——蠻地の河でくたばりたい。

俺達がお前の親なんだ、
この野原の御先祖様だ。〔親なんだ、〕
柳の奥には水が湧く、
湿ったお城を取巻いて、
見ろ、お堀の水の流れるのを。
俺達の酒倉に入って来い、
林檎酒もある、牛乳もある。

俺——飲むなら牝牛の飲むところで。

生みの親なら遠慮はいらぬ。
さあ、飲んでくれ、
戸棚の酒はお好み次第、
なんならお茶か珈琲か、
飛切りのやつが湯沸かしで鳴ってらあ。
——見たけりゃ絵もある花もある。
墓所は見納めとするこった。

俺——いっそ「ああ」甕といふ甕が干したいものさ。

3. Les Amis.

Viens, les Vins vont aux plages,

Et les flots par millions!

Vois le Bitter sauvage

Rouler du haut des monts!

Gagnons, pèlerins sages,

L'Absinthe aux verts piliers.....

MOL.——Plus ces paysages

Qu'est l'ivresse, Amis?

J'aime autant, mieux, même,

Pourrir dans l'étang,

Sous l'affreuse crème,

Près des bois flottants.

三 友達

来給へ、酒は海辺を乱れ走り、
幾百万の波の横だ。

見給へ、野生の苦味酒は
山々の頂を切っておとす。

廻国の君子等、どうだ一つ手に入れては、
アプサンの作る緑の列柱……

俺——ふん、結構な景色だ、

おい、酔っぱらふとはどういふことだ。

池の藻屑と腐るも同じさ、

どうして、よっぽどましかも知れぬ。

むかつくクリームの下敷で、

朽木がぶよぶよ浮いてるか。

かくて、que buvais-jeといふのは、かかる往相的世界には、絶対真理としての安住の世界を見出し得ぬとの意を語るものと解してよいであらう。

à genoux : ——

Phrases ㄣㄉㄣㄣ

Qu'il n'y ait ici-bas qu'un vieillard seul, calme et beau,
entouré d'un (luxé inoui) ——et je suis à vos genoux.

『前代未聞の栄耀栄華』に取り巻かれて、静かな美しい老翁だけが、
たった一人、この下界に棲んでゐてくれたら。——私は貴方の膝下に
ひれ伏します。

といつてゐるやうに、往相的寂靜の世界における——この calme et beau についても Delires I, P. 47 の条 参照。死、寂靜の世界を意味する言葉である。——莊嚴敬虔なる態度、環境を表現してゐるわけ

もの。

tendres bois de noisetiers : —

この tendres bois は往相的寂靜の世界を象徵する。Enfance 頃の images が多く現はれる。

Cf. Enfance, I.

A la lisière de la forêt—les fleurs de rêve tintent, éclatent, éclairent,—la fille à lèvres d'orange, les genoux croisés dans le clair déluge qui sourd des prés, nudité qu'ombrent, traversent et habillent les arcs-en-ciel, la flore, la mer.

森のはじめに——夢の花、静かに鳴り、鳴り響き、光り輝く——オレンジ色の唇をもった少女、草原から湧き出る明るい流の中に組み合せた膝、裸身、虹の橋と花と海とは、その裸身を量り、貫き、また著物に包む。

Cf. Enfance, II.

C'est elle, la petite morte, derrière les rosiers.

ベラの茂みのうしろにあるのは、彼女だ、死んだ娘だ。

Cf. Enfance, IV.

Je suis le piéton de la grand'route par les bois nains;.....

Les sentiers sont après. Les monticules se couvrent de genêts.

L'air est immobile. Que les oiseaux et les sources sont loin!

Ce ne peut être que la fin du monde, en avançant.

俺は矮小な森を貫く街道の歩行者。.....

辿る小道は起伏して、丘陵を金雀枝は覆ふ。大気は動かない。小鳥

の歌も泉の声も随分遠くだ。進んで行けば、世界の涯は必定だ。

その他、多くの例を見出すことが出来る。かくて à genoux dans cette bruyère/Entourée de tendres bois de noisetiers とは、往相的彼岸の、immobile な寂靜の、荘厳な世界における敬虔な態度をさしている言葉である。

Dans un brouillard d'après-midi tiède et vert : —

この句は tiède et vert など語がすべて示しているやうに、上記同様、往相的寂靜の世界を象徵するものである。

Cf. Entends comme brame.

Entends comme brame

près des acacias

en avril la rame

viride du pois!

Dans sa vapeur nette,

vers Phœbé! tu vois

s'agiter la tête

de saints d'autrefois.....

Loin des claires meules

des caps, des beaux toits,

ces chers Anciens veulent

ce philtre sournois.....

この夜気のまどはしの娼薬をもとむ……

Or ni férial
ni astrale! n'est

la brume qu'exhale
ce nocturne effet.

Néanmoins ils restent,

—— Sicile, Allemagne,

dans ce brouillard triste
et blêmi, justement!

聴け波羅門僧の如く

アカシヤの樹々のほとりに

四月 副木にからむ豌豆の

さ緑の生命の息吹を!

浄らかな夜気の中に、

月神^{フエベ}の方に!

古への聖人たちの

頭の揺れるも見ゆる……

月光白き岬の稲塚や

美はしき夢から遠く離れて、

これらしたしげな古人は

この良夜に

狭霧はながれ

祭めく綺羅にはあらず

星を浮べず!

しかはあれ彼等は居りぬ、

—— シチリヤかドイツかは知らね、

悲しげに色蒼々めし

霧のや中に、またこゝも!

Que pouvais-je boire dans cette jeune Oise,

Ormeaux sans voix, gazon sans fleurs, ciel couvert : ——

この dans cette jeune Oise は同様 Loin des oiseaux, des trou-
peaux, des villageoises とあるやうに、人里離れたところ、即ち往相
的寂靜の世界を意味する。かかる往相的寂靜の世界において、前記と同
様の意味において、Que pouvais-je boire とあるわけである。

Ormeaux sans voix, gazon sans fleurs, ciel couvert はある
ん、その寂靜の世界を形容する言葉である。sans voix は説明するまじ
もないが、fleurs は Les Illuminations にある Fleurs や Mystique
等が示すやうに、ランボオ的世界、有の絶対肯定的世界の象徴として
の意味をもつてをり、したがって sans fleurs とあることは、有の
否定的死の寂靜を意味するわけである。ciel couvert は Mémoire、

Vagabonds ; Michel et Christine その他が語っているやうな意味で、太陽 Soleil のちやならぬ世界、生命否定の往相的寂靜の世界を意味するわけである。ちやの Dans un brouillard に、また Entends comme brame に、ちや Neanmoins ils restent、——Sicile, Allemagne、dans ce brouillard/et blémi, justement. に対応する意味をもっているわけである。

Boire à ces gourdes jaunes, loin de ma case

Chérie? Quelque liqueur d'or qui fait suer : ——

ma case chérie は直接に、ちや jeune Oise よりはるか下界にある、我が家を指すわけである、le monde をちやにわけである。有の世界を意味するわけである。この下界 ici-bas (Cf. Mauvais Sang, P.21.) とこの le monde、有の世界に現成する神の世界、愛の世界、このランボオ的世界である。かへて、この ma case chérie を遠く離れた、即ち往相的寂靜の世界において、前記の意味で、一体何を飲み得たかといふわけである。

gourdes jaunes とは何を意味するのであるか。Bateau ivre におこす、

Parfois, martyr lassé des pôles et des zones,

La mer dont le sanglot faisait mon roulis doux

Montait vers moi ses fleurs d'ombre aux ventouses jaunes

Et je restais, ainsi qu'une femme à genoux.....

また或る時は、両極と地帯の旅に倦き果てて

殉教者、わが心地よき横揺れを海の鳴咽はゆわぶりて、

黄の吸角ある影の花を 海 わが方に挿頭したり、
われはそのまま坐し居たり、女性の跪坐けるうと.....

このうと、この Montait vers moi ses fleurs d'ombre aux ventouses jaunes に、ちや、安らぎ救済の手をこのうとに感じさせる。—— fleurs d'ombre にその意が明かに示される。ombre に ombrage, bois に木同様、安らぎの世界を意味している。——この ventouses jaunes なる語が附加されているのである。とすれば、jaune はちやの安らぎ乃至は救済の意を象徴する語と解し得るわけである。

また Michel et Christine に、ちや

——Et verrai-je le bois jaune et le val clair,

L'Epouse aux yeux bleus, l'homme au front rouge, ô Gaule,

Et le blanc Agneau Pascal, à leurs pieds chers,

——Michel et Christine,——et Christ!——fin de l'Idylle.

——やがて俺には見えるのか、黄色い森と明るい谷

青い眼相の人妻と、赤い額のその夫、おおゴールよ

そして二人の足元に、踰越祭の白仔羊、

——これぞミシェルとクリスチナーそれにキリストー。

——牧歌の終焉。

と述べている。この le bois jaune に、ランボオ的世界の具現せる世界としてのゴールの世界、bleu と rouge との融合統一の世界、主客未分の世界としての barbarisme の世界、即ち Nature の世界を意味する。それが le bois jaune である、le val clair である。絶対真理の世界としての安住の世界を意味するわけである。jaune は Bateau ivre

の場合と同じ象徴的意味に使はれてゐるのである。

なほ' Mémoire II にあつた

Plus pure qu'un louis, jaune et chaude paupière

le souci d'eau——ta foi conjugale, ô l'Épouse!——

au midi prompt, de son terne miroir, jalouse

au ciel gris de chaleur la Sphère rose ot chère.

一ルイ金貨よりも淨らかに、黄色く燃えた流れの眼瞼

水に咲く金盞花よ——夫婦の誓よ、おお人妻!

移ろひやすい真尽時、燦んだ水面の鏡に倚つて、

熱ばんだ灰色空のバラ色の親しげな日輪に思ひを焦がす。

といつてゐる。こゝでは la Sphère rose et chère 即ち Soleil に思ひを焦がす le souci d'eau の形容詞として jaune et chaude paupière といつてゐる。これは、同' I' における「太陽に向つて身を躍らせる女の白い肉体」L'assaut au soleil des blancheurs des corps des femmes であり、同' III' における Madame の世界であり、汚濁を知らぬ清浄なる——Plus pure qu'un louis といふ所以である——往相的寂靜の世界を意味してゐる。したがつて Mémoire にあつた jaune も同様の意を象徴するものと解せられるのである。やはり、ランボオ的窮極の安らぎはなほこゝでも、一種の安らぎの世界を象徴する語である。

また' Les premières Communions, II にあつた

Le Prêtre a distingué parmi les catéchistes,

Congrégés des Faubourgs ou des Riches Quartiers,

Cette petite fille inconnue, aux yeux tristes,
Front jaune. Les parents semblent de doux portiers.

《Au grand Tour, le marquant parmi les Catéchistes,
Dieu fera sur ce front neiger ses bénitiers.》

司祭はいつぞや眼にとめたのだ、場末町や

お屋敷町の、選り抜きの信者たちのあひだから、

眼の悲しげな、額の黄色い、名も知らぬ

あの一人の少女を。両親はおとなしい門番らしい。

「聖体拝受の日になれば、神様は、みんなの中から特に選んで、

この子の額に、聖水を雪と降らせ給ふぢやろ。」

といつてゐる。キリスト教信者の中から選ばれる、選り抜きの少女の額が Front jaune なのである。ランボオにおいて、キリスト教は、彼岸の世界として、この世の汚れを知らぬ、清浄なる世界であつたのである。その選り抜きの少女の額が jaune であるのである。Enfance, I' におつて、

Cette idole, yeux noirs et crin jaune, sans parents ni cour,
plus noble que la fable, mexicaine et flamande; son domaine,
azur et verdure insolents, court sur des plages nommées, par
des vagues sans vaisseaux, de noms férocelement grecs, slaves,
celtiques.

この偶像、眼は黒く髪は黄に、親もなく、侍者もなく、物語よりも気高く、メキシコ人でありまたフラマン人。その領土は、傲岸無頼の紺碧の空と緑の野辺、船も通はぬ波濤を越えて、猛々しくもギリシ

ヤ、スラブ、ケルトの名をもて呼ばれた浜辺から浜辺に互る。
この *idole* が *yeux noirs et crin jaune* である。

かくて、ランボオにおいては、*jaune* は往相的乃至は還相的世界における安住の世界、安らぎを象徴する語と解してよいであらう。

かくて、*gourdes jaunes* とは、この場合、かかる人里はなれた *jeune Oise* の寂静の世界、安らかな世界を象徴するものと見てよいであらう。

ランボオの窮極の世界、有の絶対肯定的世界、潑瀾たる生命展開の世界、*aquarium ardent, été dramatique* から見れば、それは所詮抽象的、観念的であることはまぬがれないにしても、なほ一種の、一時的安住を与えることも否み得ないであらう。

もちろん、ランボオの窮極の立場から見れば、それは *Vérité, Dieu* の世界ではない。その意味において、一応は寂静なる安らぎの世界であるとしても、一体何が飲めようかといふ意であらう。

かかる *gourdes jaunes* への飲めよは *Quelque liqueur d'or* ではなく。なほこの *liqueur d'or* は「金色の酒」ではなくは「金の酒」であること考へられ。 *de l'or* は *Mauvais Sang*, P. 19 である。

Je reviendrais, avec des membres de fer, la peau sombre, l'oeil furieux : sur mon masque, on me jugera d'une race forte. J'aurai de l'or : je serai oisif et brutal. Les femmes soignent ces féroces infirmes retour des pays chauds. Je serai mêlé aux affaires politiques. Sauvé.

俺は、鋼鉄の四肢と、浅黒い肌と、兇暴な眼とを著して、還つて来

るだらう。人々は俺の面貌を眺めて強烈な人種の生れと考へるだらう。黄金を俺は貯めよう〔黄金を俺は得るであらう〕。何も為ない、しかも獣物のやうな男にならう。〔しかも生れたままのうぶな男であるだらう。〕女達は、熱帯の国々から帰還するこれらの兇暴な廃人共を看護するのだ。俺は政治の渦中に捲き込まれるだらう。救はれるのだ。

といつてゐるやうに、絶対真理の世界、神の世界、否定的転換としての徹底還相行を著して *j'aurai de l'or* といつてゐるのである。けつて単なる否定的彼岸の世界を著してゐるのではない。

Nuit de l'Enfer, P. 36 へ

Veut-on? Je ferai de l'or, des remèdes.

Fiez-vous donc à moi, la foi soulage, guide, guérit. Tous, venez,——même les petits enfants,——que je vous console, qu'on répande pour vous son coeur,——le coeur merveilleux!

お望みか。お望みならば黄金でも、靈藥でも作つてやらう。

それでは、俺を信する事だ、信仰が、心を和げ、導き、癒すのだ。みんな来るがいい、——子供達も来るがいい、——俺は君達を慰めよう、君達の為に、人はその心を、靈妙な心を、ふり注ぐやうに為よう。

veut-on? Je ferai de l'or は、ランボオの宗教的 *remèdes* の意味で使つてゐるであらう。その他 *Délires II*, P. 58 へ

Enfin, ô bonheur, ô raison, j'écartai du ciel l'azur, qui est du noir, et je vécus, étincelle d'or de la lumière nature.

ああ、遂に、幸福だ、理智だ、俺は天から蒼空を分離した。蒼空とは暗黒だ「天は黒いものだ」。そして俺は自然の光の金色の火花を散らして生きた。

うじくきり' étincelle d'or は lumière nature とくつて étincelle d'or である。有即無、無即有、汚濁即清浄、清浄即汚濁とくつて étincelle d'or である。

♯だ Adieu, P.84 じゃ

——Quelquefois je vois au ciel des plages sans fin couvertes de blanches nations en joie. Un grand vaisseau d'or, au-dessus de moi, agite ses pavillons multicolores sous les brises du matin.

時として、俺は空を仰いで、歓喜する白色の民族等に蔽はれた涯しない海岸を見る。金色の巨船は、頭の上で、朝風に色とりどりの旗を翻す。

とくつて blanches nations は、もちろん、ヨーロッパの民族、le monde を意味するわけであり、かかる blanches nations をもっておはれたた plages (Cf. Mauvais Sang, P. 18, plage armoricaine; etc., etc.) を空に見たとは、やはり、有即無、無即有なる意味を表現するものであり、そのうう grand vaisseau d'or が現はれるのである。うう un grand vaisseau d'or は有即無、無即有なる世界を象徴するものである。その他 Bateau ivre, 22° 参照。

かくて de l'or は、ランボオにおいては有即無、無即有、汚濁即清浄、清浄即汚濁なるランボオの神の世界を象徴する語と考へられるので

ある。したがって liqueur d'or も当然ランボオの神の世界を象徴する語と考へられるのである。

かくて、うう gourdes jaunes から飲むものは、うう jeune Oise の世界が汚れなき寂静の世界である点において一脈 de l'or に通ずるものである。quelque liqueur d'or である。しかくつて liqueur d'or は qui fait suer (Cf. Poésies : Larmes ; fade et qui fait suer.) なる liqueur d'or である。fade なるものくつて liqueur d'or に過ぎないといふ、現在の還相的立場からする否定的な意味でいふのである。したがって、汗をかせる、とは、ただ人に汗をかかせるもの、疲れさせるもの、結果の徒労に帰するものとしての意味でいふのであらう。うう qui fait suer は、ランボオがキリストに対くつて、vouleur des énergies とくつて (Cf. Les premières Communions, IX,——Christ, ô Christ, éternel voleur des énergies.) のくつて意味くつてあるものも、のと考へられる。一脈 de l'or に通ずる quelque liqueur d'or にはあるけれども、所詮は単なる往相的寂静の世界に過ぎないものであり、そこには潑刺とした生命の展開する具体的神の世界は存在しないといふ意味でいっているものと考へられるのである。〔未完〕